

スワヒリの話（59・11・17）

——テンベアのこころ——

和崎 洋一（昭17・9理乙）

ご紹介いただきました和崎です。「スワヒリ」とは東アフリカ（ケニア・ウガンダ・タンザニア）にひろがる共通語とその文化ですが、その地域で文化人類学の調査を一九六三年以来続けております。そして初めてそこへ行ったときから、アフリカに毒されたというか、未開に毒されたといってもいいかもしれません。それが何だったのか、その問題をずうっと考えてきたような気がしますので、そういうことにかかわりある話をしたいと思います。

それですが、なぜ私がアフリカなのかということですが、それにはあまり積極的な理由はありません。今西さん（今西錦司・京大名誉教授）に行けと言われて、それ以来今まで十四回、東アフリカをやって二十年経ちました。一九六三年その東アフリカの玄関ケニアのナイロビに降り立って、はるかに続くマサイ草原の風にふれた時、一九四四年（昭和十九年）敗戦の直前に（これも今

西さんと一緒だったのですが、内蒙古の民族調査のために朝鮮海峡を渡って釜山の港へ降り立ったときの実感をダブらせて思い出していたことを覚えています。それは、ユーラシア大陸の東の端釜山に立って「ここは海を隔ててすべて異国が存在するという島国ではない、ユーラシア大陸だ、その大陸はここから二本足で歩いて地続きでヨーロッパまで行ける」というものでした。

それから敗戦後復員して内地で人類学の農村調査などを行っている間に、やっと国外への道が開けて、アフリカ、しかも東アフリカのサバンナの中へ向かったのです。そのサバンナの真ん中、ナイロビの空港に降り立ったとき、いまは近代的な国際空港になりましたが、この十年前ぐらいまではまだまだ草原の中に滑走路があるというような、非常に親しみやすい空港だったのです。そこへ降り立ち乾燥アフリカサバンナを見たとき、「ああ、これから二本足で、国境、政治情勢や健康の条件をぬきにすれば、二本足で北はカイロへ、南は喜望峰まで、地続きで歩いて行ける」という、釜山における大陸の実感を思い出していました。それがまず大陸への、そして私にとっては二十年來の巡り合わせみたいな気がして、それ以来、東アフリカへ入り込むことになったのです。

それから私は私の美学Ⅱずばらのせいで、アフリカと言いましても東アフリカ、東アフリカと言いましてもタンザニアのマンゴラ村にいつ、て、初めは間借りから、今はそこで二棟と囲いの付いた庭のある豪邸を作って、そこを根拠地として現在まで調査を続けています。豪邸とい

うのは嘘ではありません。この村でトタンを使った屋根があり、庭を囲った塀があるような家というのは、まず豪邸です。しかしその豪邸も掘っ立て小屋でありまして、五年ぐらい経てば柱や屋根等は全部白アリにやられてしまつて、建て換えるか、放っておけば廃屋になってしまいます。私はいままでに五回建てかえました。そういう生活の中で考えたもの、それは未開とは何か、裏返して言えば文明とは何なのか、ということなのです。そしてその答の一つとして先ほど大陸に降り立ったときの、二十年前にも感じた感想「二本足で歩いたらどこまででも行ける空間」という発見でしょう。今も「未開とは何か」ときかれたら、私はまずこれを挙げたいと思います。「ここは二本足で歩く空間を持っている人が住んでいるところ」、それを裏返



新築中の「豪邸」第1号、マンゴーラロンド（1967年）

しますと、「二本足で歩くことを忘れてしまった人間の住むところ」が文明ではなかろうか、という気がしております。

まあおきはそれぐらいにしておきまして、一体そこで私はどんなものを見たのか。あるいはどんなアフリカ像、あるいはどんな未開のイメージを作り上げたのか。これについてこれからお話ししたいと思います。それはアフリカ人に聞けばそうだ、ということではなく、文明人の私が、アフリカへ行ってその中で作り上げた「アフリカ」という意味だということを初めにお断りしておきます。

いま「二本足で歩く」と申しましたが、これをスワヒリ語でテンベアといいます。スワヒリ語は一部族の言葉ではなく、東アフリカの部族の上の共通語で、その使用人口は約三千万人といわれています。テンベアは基本的には「二本足で歩く」という意味を持っていますが、ちよつと家を出て村をぶらぶらしているときに、「何してんのや」と言われて「テンベアしてんのや」といえば、これは「散歩する、ぶらつく」ということです。また「あの少年はテンベアしている」といえば、これは少年が「家を出、村を出て、そしてどこかサバンナをうろついている」、つまり（旅行ではなく）「旅する」「放浪、あるいはさすらい」というふうなニュアンスを持っています。つまりテンベアは家を出てぶらついているという意味で、どこかに反倫理的と言いますか、反社会的な匂いを持った言葉です。しかし、そうかと言って、そのまま、それはけしからん、しては

いけない、ということではないのです。テンベアは反社会的行為であると共に、サバンナの男はテンベアする自由を持っています。つまりテンベアは男の行為で許されるもので、女の人がテンベアをしているというと、日本語で言えば尻軽女であり、してはならないことになります。

たとえば私が調査をかねて、ぶらぶら村の家を尋ねて行って「奥さん、どうしている」と言うと、そこのご主人が「しょうがないやつだ。またテンベアしている」というような話になるので、つまり、スワヒリ語の「男は外をテンベアするもの、女は内にいるもの」(注・一)というサバンナの倫理観から外れるわけです。私が調査の日課として村をテンベアしている。そうしてとある家に辿り着きます。そして家人に「何をしているか」ときかれて、「いやテンベアしているんだ」というようなことで会話が初まり、それが調査のきっかけになるのですが、こんなこともあります。そのときはご主人がいなくて、奥さんだけが家庭の仕事をしていました。「テンベアして儲かるか」と奥さん。「いや、儲からん」と私。その私に向こうが大変奇妙な顔になりまして「儲からんことをなぜやるんだ」というような話になるわけです。そのときは決まって「儲からんことは面白い」という答えをちゃんと用意しておりまして、草原の哲学にはない話で、向こうを一層キョトンとさせるわけです。そして話がすすんで「一体どこから来たのか」「ジャパニ(スワヒリ語)だ」「ああ、そうか」と話は展開するのですが、彼らはジャパニがどこにあつて、どんなものであるということとは全く知らなくてもお構いなくちゃんと話は進行します。そのとき

にこれは面白いなと思うのは、私はサバンナの住民というのは、大変客扱いが上手で、ホスピタリティーの高い民ではないかということです。いいかえれば、その客扱いのおかげで、私たち調査者が「土足で座敷に上る」ような失礼を知らずに行き回しても、とがめられることもなく「わかりあった」と思い込む過ちを私たちがして来たということでしょう。つまり部族や部族社会などという言い方で紹介をされ、それをわれわれが非常にクローズな世界だと思い込んでいるものは逆だということなのです。

さて話は、どこか遠くの、ジャパニという国から来て儲からんテンベアをしている立派なおトナの奥さんのことになります。それが「奥さんあるか」「ある」で終らず、「では何人あるか」となって、今度はこちらがびっくりさせられる番になります。「たった一人だけ」「えっ、たった一人だけ（こんな立派なおトナが）……」というようなことで話はだんだん家の聞き込みの話になっていくわけです。そんな調査の内幕はさておき、「たった一人しか奥さんを持たない立派なおトナ」ということだと思うのが、先程のべましたスワヒリ語の言葉「男は外をテンベアするもの、女は内にいるもの」ということです。このテンベアは、くりかえして言えば家を出て村内をぶらつくにせよ、村を出てサバンナをさまようにせよ、本質的に反社会的意味をもった行動であり、これを日本式にとれば、「何人も奥さんをもって男はいつも女の人に家の仕事を任せておいて、いつでもどこかをほったき歩いて酒にあり付くことを考えている、結構だ」ということになるで

しょう。しかし私はいま、男と女に対して持っているわれわれの価値観からこのように考えたら大きな間違いであるということを、私のつくりあげたアフリカ観で考えてみたいと思います。つまりこんな男の生活は女にくらべて結構だ、というような平等原理の価値観でなくて、ここにはわれわれと違う男と女の世界があり、この二つの世界が平衡を保つことで社会が成立しているのが未開の原理なのではないかということなのです。

誰でも人間は、生まれて成長して死ぬ。これは未開であろうとわれわれ文明社会であろうと、変わりはありません。その一生を私たちは、人として生まれていることに疑いをもたない。つまりヒューマニティーの意味するもの（強く意識するかしないかは別として）が基礎になって一生を送る。つまりどこかにいつでも男と女は人として同じなのだ、平等だと考え、それを裏返したら差別はいけない、という世界を築き上げてきた。あるいは男と女が平等でなければならない人間性を獲得する努力目標を支える価値観をわれわれは持っています。それを私は平等原理といったのです。

ところが「男は外をテンベアし、女は内にいるもの」という東アフリカのサバンナの住民たちは、人として生れるものでなくて、男として生まれ、男の世界で成長し、男の諸々のことを学んで老いて、男の世界で死ぬものであるということ。また女は女として生まれ、そして育ち、諸々の女の世界のことを学び、そして老人になって死ぬものである。これが私がマンゴラ村で暮ら

した中で感じていた、非常に異質な、われわれと違う、そして文明社会にない、しかし非常にほれられする世界だ、ということなのです。つまり男の「社会」ではなくて、男の「世界」に男として生まれ、そして男として成長して死ぬ。また、女として女の世界に生まれ育って、成長して死ぬ、という人の作る社会をみたということでしょう。

こんな事件がありました。それは村で、いまから言えば十余年前、私の近所のある夫婦の家で、奥さんがお産をし赤ん坊を残して亡くなりました。そしてその赤ん坊を男たちの手で世話できないので男たちにたのまれて、私が百キロほど向こうの病院へ車で運んでやりました。ところがその奥さんの死を契機に、ある日、突然女の人がわれわれの回りからいなくなってしまったのです。それはどういうことだったのかというと、村から百キロぐらいサバンナを通った所に山が一つありまして、そこへ近隣の女の人が、牧畜民のダトーガ族も、農牧民イラク族も、また農耕民バンツー系諸族も、部族をこえて集まり、その山の上で女の呪術師（これも日本語に訳すと大変堅いのですが、その死んだ女の人のために儀礼を行うのです。それは霊をなぐさめるのかもしれません。あるいは霊をなぐさめるといっても悪霊を外へやってしまう、ということかも知れないし、あるいは神に許しを請うのかもしれない）が、そこは女の世界で男の入り込む所ではない。少なくとも私の周りの男の連中に聞けば、少なくとも、その死んだ奥さんのための儀礼なのだ。そして「あつ」という間に、女の人はいよいよたん一つを持ち、牛乳を入れて、サバン

ナのプロシユの中へ姿を消してしまったのです。このときに、実際に聞き込んで本当に確かめたわけではなく、私の実感なのですが、われわれの世界だったら、誰かがその行為を主張し、旗を上げ、それに賛同する人間が寄り集まって共同の行動をとる。ところがその気配は全くなくて、ある日、当然のごとく、子供を残して死んだ一人の女の人のための儀礼がこんな形で行われました。これこそ、私が女の世界を実感する、数少ない例の一つであるのです。つまりその村の女として、部族的レベルでない、もう一つ上の、「女の世界」のこととして、その行為を受け取ったというふうに見えるのと大変わかりやすい、というより、私にとって納得のできるということです。もちろん、これこそ私の中につくりあげた東アフリカ像であって、そんなことをこっちが聞いても、こんな答えが返ってくるということではありません。

ここでもう一つ、ヒトの一生についてマンゴラで感じた事を述べておきます。それは、ヒトの一生には完結している一生とそうでないもの、つまり分断された一生とがあるのではないか、ということなのです。ここで完結とか分断というのは、ヒトの一生のさまざまな段階で、その成長の節目々々をそのヒトの帰属する社会が、どのように認知しているか、あるいは認知する集団とヒトとの関係がどうであるか、ということです。それを私は、マンゴラの暮しを通して次のように考えています。誕生の際にそのヒトの生を認知した集団が、そのヒトの成長を認知し、かつその人の死も認知するというのは、そのヒトの一生の節目々々を同じ集団が認知するということで

あつて、未開の一生というのは、完結した一生なのだと感動をもつて感じるのです。あるいは一生を完結できるのが未開なのではないか。逆に言えば、われわれの文明社会というのは、生を認知する集団と、様々な段階で様々な成長段階を認知する集団というのは、全くばらばらである。つまり分断された一生を送る。しかもこのごろ起りつつある孤独の死という、誰にもその死を認知されないような死まで起こってきているというふうなことに對して、未開というのはそうではないということなのです。

マンゴラの村で、非常に遠い数百キロ向こうから来た男が死にました。その身寄りが一年ほど経つて、その男の遺品の弓と矢を取りにはるばるやって来しました。その部族では跡取りが親父の弓と矢を受け継ぐということになっているのです。マンゴラでその男が死んだとき、その死を見取るあととりもいなければ縁者もいなかった。しかしこれは孤独な死かというと、そうではなしに、その情報はサバンナを越えて、二本足でテンベアする人間が持つて行つていたのです。そしてその情報をうけてすぐ駆け付けるといふのではなしに、一年経つたあと、このようにしてその親の遺品を取りに來ました。見事に完結した社会、完結した一生を終えているという感動とともに、あらためてサバンナをテンベアすることの重大さを知りました。テンベアはそのヒトの一生とともに、他人の一生をも背負つて歩いてゐる、という意味です。

さて、あらためて、サバンナの男と女というものに戻りますと、「男は外をテンベアするもの、

女は内にいるものだ」という言葉には、男が外をぶらぶらしている、女は家の中でじっと家事をやっている（というふうに取り上げ取ったてかまいませんが）、ということだけではないものを感じないわけにはいきません。そこに私は、見事に文明社会が失ってしまった未開の構造を示すてがかりがあるという気がするのです。そこで先ほど男は男の世界に生まれて、女は女の世界に生まれて、もともと別の世界を持っていると言った考えにもどって考えてみたいと思います。ところがどこの世界でも、人間や人間以前のサルの世界でも、社会にはいろいろな形がありますけれども、当然一つの社会を編成するために、何か強い誰かがリーダー・シップを取るものであり、人間ならば世界の大勢では男が権利を持つ社会を作ってきました。そういう意味では外から見てもその構造は男が女より偉いというのか、見事に権力があるわけです。そして、文明社会では男も女も人間として同じなのだという理念、私はさきにこれを平等原理としましたが、その実現に向って努力しているのだと思います。それに対して、サバンナの世界の「外をテンベアする男」と「内にいる女」がつくる社会も、やはり外から見れば男優位の原理で編成され、それを平等原理の世界に引き入れて、批判考察することができ、国際婦人年の十年をしめくくる国際会議がケニアのナイロビで開かれたのも、アフリカの「未開の女」の社会的地位の向上という意図があったことは確かです。私はいまここで、この会議に盛られた文明の側からの平等原理に対して、サバンナの世界にある平衡原理にふれてみたいと思います。それは、平等原理に立つわれわれには、

不平等に見える男と女の行動規範も、次のように考えれば私には非常にわかりやすく、別の世界が見えてくるのです。それは家であれ、近隣社会であれ、村であれ、また部族社会であれ、一つの社会を編成する男と女が、もともと別の世界に生れ育ったものである。そのときに男と女はもともと人として同じなのだというよりも、外へのベクトルを持った男と、内へのベクトルを持った女という、完全に違った世界の人間が、一つの社会を作るといふことのほうが、何か非常にわかりやすい。ひいきの引き倒しみたいな話で恐縮ですが、そういうふうに見ているのです。

その男と女の二つの世界について、私の考えを述べておきます。われわれは文明の論理はニュートン力学的な世界として受け止める。それはある曲線を一つ取れば、曲線は細かく無限小の線分 $\parallel$ 直線の集まりが曲線になっている。それは分析的方法というものであって、その直線の線分の総合が全体の曲線になる。つまり全体と部分というものをいつもそのように分析し、かつ総合することができるもの、そしてそういうふうの説明できるものとして受け取ることにしてきました。ところが未開の男と女の世界が一つのサバンナの人々の社会を作っていることには間違いはないけれども、しかしそれは全体の世界を分析したら、分析的手法で男と女が分かれているのは違って、数学的表現で恐縮ですが、全体世界の縮小写像として男の世界と女の世界がある、だから二つの世界は小世界であって、それが全体の世界を作るけれども、部分ではないということです。二つが全体を作るとは間違いないのですが、線分の部分を寄せ集めたら、それが曲線に

なるといふうなニュートンの世界の部分ではない。全体を小さく写し取っている小世界が、男の世界であり女の世界である。そして、イエであれ部族社会であれ、二つの小世界のもつ、外向きと内向きのベクトルが平衡して、一つの社会が編成される、ということであります。男優位という形態にとらわれるだけでなく、こう考えると、東アフリカへ行かれた人からよくきく、サバンナの太陽の輝きと同様に、何と女の人が明るいか、ということばは、（確かにそれは明るいと思います）小世界として、男が男の世界、女が女の世界に居るのだといふうに受け取つてもいいのだと思います。

それならばそういうふうな男と女が別の世界に居るといふことに面白い例があります。私のマングローラ村にあるバーライ川はアフリカの乾燥地帯としては珍しく豊富な湧水を持った川で、年中枯れることはありません。そこが貴重な水場であり、水場は女の世界なのです。女の世界というのは男は踏み込んではいけません。もちろん自然の川ですから、いないときにそこに男が行つて、水を飲んだり浴びたりするのはかまいません。女の世界は普通の家で言えば、三間取りの家の一つの部屋に石を三つ置いて竈とし、その台所が女の世界です。鍵のかかるドアがあるわけではありませんし、壁にある通路が開いているからといって、無闇に入るといふようなことは絶対してはいけません。それは非常に失礼にあたるわけですが、われわれ知らないうちは、何も扉もないから「こんにちは」と言つて入つて行つて、竈のそばへ行つて話を聞く。つまり聞き込みと

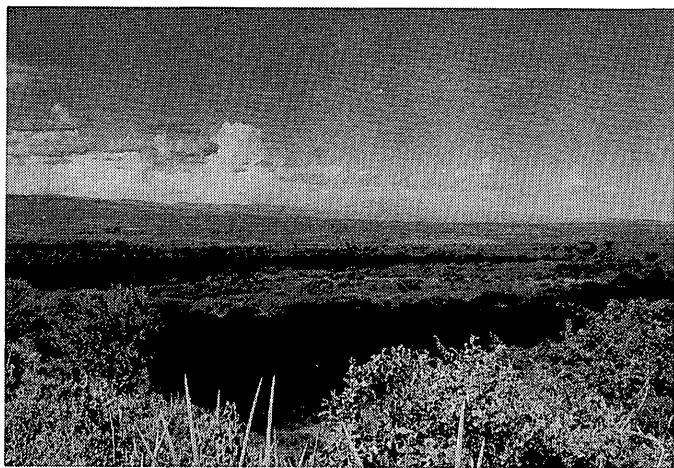
いう仕事をするのです。しかしそれは本当は非常にいけないことなのです。けれどもそれを彼らは何ら拒否しない、あるいは拒否する姿勢を示さない。これは先ほど言いましたように、やっぱり非常にホスピタリティーの高い文化だと思うのです。単に未開だからといって、高いものと低いものの違いで考えずに、私はやはりホスピタリティーの非常に高い行動だと思っているのです。その男と女の世界の水場に戻りますけれども、女の世界の水場へ男はいけません。ところがたまたまその時間に水を汲みに行かなければいけない男がいました。それはそのころ赴任して来た小学校の独身の若い先生が、毎日の水は小学生を使って水を汲みにやらせて、家の水にしています。その水汲みというのは女と子供の朝と夕方の重要な家事であります。あるとき先生が自分で水を汲まなければならなくなりました。そのとき先生は女の人が身体に巻き付けるのと同じ頭からかぶるカンガという布の片一方のほうだけを頭に巻いて、バケツを持つてひよこひよこと水場のほうへ行くので、「おまえ何してるんだ」と言っ



東アフリカの農耕民（女性）
伝統的服装

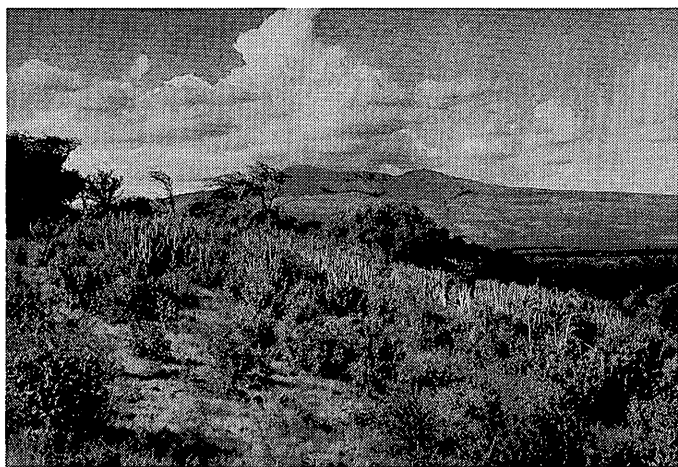
たら「いや、ちょっと水場に水を汲みに行くんだ」と言う。「いま行っているのか」と言ったら「女装しているだろう」という説明なのです。つまり完全に男であることがわからないという意味の女装ではなしに、いま私は女になった、ということを示す建前の女装であって、いま私は女なのだ、だから私は水場へ水を汲みに行ってもよろしいということなのです。サバンナの生活で、しばしばこのように建前をはっきりと示されてびっくりさせられます。それは非常に乾いた、乾燥地帯の乾きと同じように何か人間が非常に乾いたと見てもいいのです。つまり本音というのが、全く無意味なくらいに建て前が先行するというこの文化にふれて、私は東アフリカが大変好きになったと思います。

さて、男と女、一生、テンペアする空間にふ



めぐり会っている (1963年)

れて来ましたが、そのサバンナの実感を
テンベアしている人間は「山と山とは巡り会わ
ないけれども、人と人とは巡り会うものだ」
(注・2)とっています。つまりこれは、果て
しなくひろがる草原の中に、アカシアが点々と
続いて、その地平線の緩やかな起伏の向こうに、
百キロぐらい先までは悠々と見えますが、その
向こうに山が顔を出しているという景観の中を
テンベアしていく人間を、頭に描いて下さい。
そのテンベアをしていますと、一日、二日、そ
して一週間も人に会わない空間がまずわれわれ
と異質な世界を実感させますが、そこへある黒
い動くものを見たとしたら「あつ、人間か」と
いう意識を持つのが当然だと思うのです。そし
てある距離になったときに「ああ、ハイエナで
あったか」「ああ、ライオンであったか」「ゾ



マンゴーラのサバンナ、ここで人はテンベアし、

ウであつたか」「動かない岩であつたのか」とわかる距離まで近づきます。そして、地平線から顔を出している山と同じように、人はライオンにもゾウにも会うことはないでしょう。しかし人ならば、それからずうっとお互いに近付いてめぐり会い、そしてまた草原のどこかへ別れていくのです。まさにそのときに巡り会うことのない山に対比させて、人と人は巡り会うものだ、と彼らはいっているのです。ここで山というのは何も具体的に山というものだけではなく、山で象徴されている自然全体、人以外のサバンナすべてを言っているのですが、サバンナの実感を彼らは人と対比させてこのように言っています。

もう少し言いますと、私がマンガローに居てだんだん知り合いができます。それがサバンナをうろろとテンベアしており、私もテンベアをする。そして文明の過密の中の断絶、疎外というのと逆に、人気のないサバンナの広がりの中で、思いがけず知り合いに出会うのです。このとき私だったら去年日本へ帰って、また来たときの思いがけない再会を喜ぶのですが、彼らはそのときに「いや和崎さん、山と山は巡り会わないけれども、人と人とは巡り会うもんだ。これが人間なんだ」という言葉を返して私のように喜びとか感動というものは全然顔には出さない、何か非常に難しい顔つきで再会の瞬間を持つのです。そして、それから突如身体中に再会の喜び、感動を表して、握手をするのです。この握手というのも手につばを吹きかけて握手をして、またぱつとやって握手をするので、日本式不潔感を持っていたらなかなかできないでしょう。初めはやは

り抵抗がありましたけれども、もう平気になりました。そういう言葉で再会の喜びを私に伝えてくれましたが、それは自然と人に対して、アフリカの草原の住民の感じ方は確かに違うということでしょう。

どうも人間と自然というものの関係の仕方が根本的に違うのです。われわれ文明の世界では、山があれば必要であればブルドーザーでつぶすことはないにしてもトンネルを開ける。海があったら海を埋め立てて地面を作る、人を害する猛獣なら射ち殺す。逆に花鳥風月を愛し、野獣を囲い込み、ペットをこよなく愛す、ということとはわれわれにとって自然（ヒト以外）は対立しているがいつでも自分の中にとり入れることのできるものと信じている。このような対立感覚ではなく、ここでは自然と対置している関係として人間を見ている。つまり自然の中にライオンが、象が、うろうろと動いているのと同じように、人間もまた人間として対等に動いていて、しかも人間は人間以外のもの、自然と違うのだという認識だと思うのです。これを私は、未開では人間もまた自然内存在なのだが、文明では自然もまた社会内存在だと、言いたいのです。テンベアする空間とはこういうものであり、そんな空間をもつ人間がいるのが未開であり、そこで男と女が別の世界に生き、その二つの世界が平衡原理で一つの社会をつくっているのです。

そのサバンナの世界で、私は完結した一生に感動し、建前の見事さに感動しているわけですが、また、未開というのは見事に簡潔なのです。簡潔は単純ではありません。私はここでこんな経験

をしました。いばらの多いところではだしている子ども達は、みなわれわれ調査隊の持ち込んである日本製のゴム靴などは非常にほしいと思っている。ところがあるとき非常によくやってくれる一人の子供にわれわれの持ってきた運動靴をやりうと思いました。私は当然喜んで受け取ってくれるものと思つてやったら、彼は受け取らないで返すのです。「何だ、要らないのか」と言つたら「僕のほしい靴はこれではない」と言うのです。あれだけほしいと思つている靴なのですが、彼は僕のほしい靴はこれではないといつて断りました。われわれであつたら、立派な靴は靴なのだからこれはこれでまた使い手があるというふうな受け取り方を彼が絶対にしなかつたというところで、私は未開の文化、行動の簡潔性を思い知らされました。これも私がサバンナの中に身を置いて、あばたもえくぼと反省するほどにスワヒリの世界が好きになつてゐることの一つの条件だと思ひます。

それでいまの簡潔性や、完結した一生を持つてゐるとか、二本の足でテンペアでできる空間を持つてゐる男と女の二つの世界、そういう点を指摘して、私にとつてのアフリカを描こうとしました。「本邦初演」で大変まとまりのない話になりました。これでやめますが、しめくりとして日頃思つてゐることを一言付け加えておきます。結局私はこんな形で未開というものを認めたとしても、確かに未開から文明へという人類史の逆行しない足どりの中で、ここもまた未開のままでもいいというはずでもないし、ましてわれわれはよそ者で、文明世界に身を置いて、文明の恩恵

を享受している人間がとやかく言うことではないでしょう。そしてアフリカの未開はいつか文明という状況に入り込まなければならぬし、入って当然だし、それは確かなのですが、ただそのときに、忘れてならないこと、あるいはアフリカに行つて感じたこととして重要なことは、いま文明社会の人間が日本もそのトップの一つとして、文明というものは決して桃色の未来を約束するものでないということを気付き出したことは、桃色の未来論が流行ったときから見れば、少しはましになっています。しかしここで重要なことは、われわれはいまの文明というのは、いろいろな過ちを犯し、間違いを持っているが、その過ちを修正したらこれでもいいのだという修正可能なものとして、いまの文明というものを受け入れているということ、だから文明はなかなか修正できない面を持ち、まだ悪いことをいっぱいしていくのだろうが、しかしやっぱりどこかで修正可能だと思つて安心をし、修正したらよいものなのだということを前提にして未開に文明の側から手を差し延べて満足しようとしているのですが、私はこれは大きな間違いなのだということがあります。つまり文明というのは、どこか一部悪い所を修正できるものではないと、まず認めるのが、むしろ文明を正當に評価することではないかと思うのです。

だからあつさり、もしも未開というものにわれわれが学ぶものがあるとすれば、あるいはしなければならぬことがあるとすれば、未開から学び取つて、文明を少しでもより良くしようということではなくて、文明の様々な過ちを未開に教えるという状況を作り上げていくことが、い

ちばん大事なのではないかということです。さらにもう一つわれわれの陥っている誤りを付け加えれば、どんな未開もいま未開から文明というコンテクスからはずれることはないにしても、いまの未開がなっていく文明というのはこれしかない、いま作り上げたわれわれの文明しかない、ということはわれわれの思い上がりではなくて、間違いだと思ひます。その文明でない第三の文明だってあるのではないか。そんな第三の文明を期待して、われわれはわれわれの文明の過ちというものはつきりさせていく。それが未開への態度であると感じているのです。つまり私が未開の様々な感動を挙げると、それではわれわれも未開にまだまだ学ばなければならぬことがありますね、という非常に素直な賛同の意が返って来ますが、私は未開のよい所を学び取ってわれわれがなくしたものを思い出す、あるいは悪くなったところをそれで修正していくなどという形での未開のとらえ方は、間違いだといいたいのです。そしてこの未開がなぜ私らにとって大事かといえ、いま修正不可能なわれわれの文明に代って築くべき可能性を持ったものが未開なのだ、という意味で、大変重要ではないかと思ひているのです。もちろんそれは人類学の調査研究の立場を超えて、人間として暮らしてみても何かそこが好きになったということの裏返しに、何か答えを出さなければならぬとすればそういう答えがあるということです。大変まとまりのない話でしたが、これで終ります。

(注) スワヒリ語を付記しておきます。

- (1) Mwanamume hutenbea nje, mwanamke hukaa ndani.
- (2) Mlima haikutani, watu hukutana.

(中部大学国際関係学部教授
前 富山大学人文学部教授)